

## シルビカルチャー（Silviculture）

シルビカルチャー（造林・育林）というのは、森林の構成、構造、成長を管理することです。森林は林分と呼ばれる単位ごとに管理されています。林分というのは、樹種の構成、条件、樹齢の分布などが似通っている木々のかたまりのことです。林分は樹齢が同じでもよいですし、異なっても構いません。同じ場合は林齢ともいいます。

森林経営者はシルビカルチャーのいくつかのシステムの中から、収穫（伐採）と育林の方法を選ぶことができます。これらの方法には、皆伐、種木、複層林、一本あるいはグループの択伐などがあります。

皆伐システムでは、林分のすべての木々が同時に収穫されます。そうすることで、樹齢のそろった林分を新たに育成することができます。皆伐システムでは、太陽の光がよくあたる場所で伸びる樹種に向いています。新しい林分は近隣の林分からの種子や林床（地面）に落ちている種子（実生）、切り株や根（傍芽）から成長します。または、種をまいたり（実生）、苗木を植林したりして、森林を再生します。

種木システムは、成熟した林分の樹木を伐採する際、それぞれの林分に種子をつける木を何本か残す方法です。これらの木が、新しい、同齢の木立が再生するために必要な種子を供給します。種木は、ときによって、新しい若木が伸び始めたら、収穫されることもあります。

複層林（シェルター林）システムは、成熟した林分を何年かにわたって部分的に伐採することです。初期の伐採では、残りの木々の活力と種子の生産が向上することが期待されます。また、新たな芽吹きのための場も提供します。残りの樹木が種子をつけ、そして、若木のシェルターにもなります。後で、シェルターであった木々を伐採し、同齢の林分の再生につながります。

一本択伐システムというのは、異年齢の林分を創りだし、維持するための方法です。フォレスターが林分を調べ、それぞれの樹木のメリットを評価します。木々は成熟すれば伐採します。芽生え（傍芽）がその後生まれます。定期的な間伐や収穫（択伐）によって、林分にはさまざまな年齢と大きさの木が含まれることとなります。どの伐採においても、比較的少数の木が収穫されるので、林床は通常日陰となっており、日陰を好む樹種に適した方法です。

グループ択伐システムは、個別の木ではなく、小さなグループでの収穫のことです。林分の中で、数本を伐採してできる空き地は皆伐の状況に似ています。一つの違いは、同齢の林分と全体を呼ぶには、数が少なすぎるという点です。一本択伐のシステムと同じように、間伐と収穫（択伐）が同時に行われます。伐採跡地の小さな空間に育つ新しい木々は、全体の林分のさまざまな年齢の分布の一部を構成していると考えられます。一本あるいはグループ択伐システムのいずれにおいても、樹齢、等級、大きさのバランスを保つためには、頻繁な伐採（収穫）が必要となります。